

現行の障害児教育の誤り

こうした経験を重ねる中で、私は「どんなにひどい脳障害児でも、漢字が覚えられない子どもはいない」ということ、そして、また「漢字を覚えるにつれて、頭の働きは確実によくなる」ということを確信するようになりました。

生まれつき脚の丈夫な人でも、脚を使わないでいると脚が弱くなります。その反対に、どんな脚の弱い人でも、脚を頻繁に使っていれば必ず強くなっていきます。頭も脚と同じことで、使わないでいると弱くなり、頭をよく使うようにすれば、どんなにひどい脳障害児でも頭の働きがよくなるというのが道理です。ただ、そこには、脚の弱い人が歩くのに最初は杖が必要なように、脳を働かせるためには漢字という適切な道具が必要なのです。

ところが、今の障害児教育では、漢字は難しすぎると考えられていますので、逆に覚えにくいかなばかり教えています。だからなかなか覚えられず、また覚えたところで、かなには意味がなく、生きいきとしたイメージが湧きません。そのため、かなを学んでも頭が働かず、したがって脳の働きがいつこうによくないのです。これに反して、漢字は具体的な意味をもっていて、生きいきとしたイメージを頭の中に湧き起こさせますので、自然と頭が働き、脳の働きがよくなっていくのです。

私の研究所の教室には、言葉が覚えられない脳障害児のクラスが

ありましたが、ここでも、漢字は素晴らしい効果を発揮しました。

たとえば、時計を見せながら「これはトケイだよ。トケイ、トケイ……」とくり返して言います。そしてすぐに、漢字カードを示して「これはトケイという字だよ。トケイ、トケイ、……」と、これもくり返して言います。子どもが興味を示しそうな品物とその漢字カードをたくさん用意しておき、これを順番にやっていくのです。

教室は一週間に二日、それも十時から十二時までの二時間だけですが、そのうちこの学習を十分くらいします。これだけの学習で「時計」という漢字カードを示すと、実物の“時計”を指で示すようになるのです。そして、「よくわかったね」と誉めてあげますと、子どもはいかにも嬉しそうににっこりします。

言葉を口に出せない子どもでも、漢字がそれぞれに意味をもっていることがわかり、漢字カードと実物とを正しく結びつける作業は、とても楽しいもののようです。だから、この作業をするときの子どもの目は輝いています。

漢字カードに書かれた物を指せるようになったからといって、すぐに発語に結びつくわけではありませんが、これを続けていきますと、いつともなく自然に子どもの口から言葉が出てくるようになるのです。